



福岡県医発第 613 号 (総)

平成 28 年 5 月 24 日

各 医 師 会 長 殿

福岡県医師会

会長 松 田 峻一良

(公印省略)

第 5 回「日本医師会 赤ひげ大賞」候補者推薦について

標記につきまして、日本医師会より推薦方依頼が参りました。

本賞は「現役の赤ひげ」と言うべき、地域に根差した、地域住民の日々の健康管理と診療を親身になって行っている医師を顕彰すべく、「医師魂」をもって地域医療に貢献されている現役医師を対象としており、今回 5 回目となります。

つきましては、別添要項に該当される方がおられましたら、候補者推薦書により来る 7 月末日までにご推薦いただきますようお願い申し上げます。

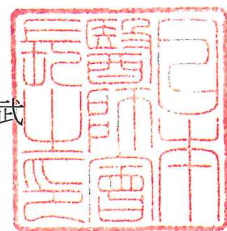
なお、

- 1) 今回より、推薦要項が改定され「原則として、70 歳未満の方を優先」の基準がなくなりました。
- 2) 都道府県医師会より推薦した候補者で大賞を受賞されなかった先生にも、その功績を称え表彰状が贈呈されることになりました。
- 3) 該当者がいない場合もその旨ご連絡下さい。

平成 28 年 5 月 16 日

都道府県医師会長 殿

日 本 医 師 会
会 長 横 倉 義 武



第 5 回「日本医師会 赤ひげ大賞」候補者推薦 (依頼) について

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。日頃より会務運営に際し一方ならぬご高配を賜り、深く感謝申し上げます。

日本医師会では「現代の赤ひげ」と言うべき、地域に根差した「かかりつけ医」として、地域住民の日々の健康管理と診療を親身になって行っている医師を顕彰すべく、「日本医師会 赤ひげ大賞」を平成 24 年度に創設し、実施しておりますが、今般、第 5 回の候補者のご推薦を頂きたくご依頼いたします。

本賞が、先生方の励みとなり、それぞれの地域で地域医療の充実にご尽力いただけるよう、このたび推薦要項を改定し、「原則として、70 歳未満の方を優先」の基準をなくすことといたしました。

また、今回より、各都道府県医師会よりご推薦いただきました候補者の先生方で惜しくも「大賞」を受賞されなかった先生方にも、その功績を称え表彰状を贈呈することといたしました (その場合も次年度の赤ひげ大賞の候補者として再度ご推薦頂けます)。

なお、「大賞」受賞者は、各都道府県医師会長よりご推薦を頂いた候補者の中から、第三者も交えた選考委員会において選定し、表彰式を平成 29 年 2 月 10 日 (金) に挙げる予定としております (大賞以外の先生方には表彰状をその後に郵送いたします)。

また、別紙文書にて、各郡市区医師会長宛にも本件に関する協力依頼を F A X にて送信しており、「候補者推薦書」の提出先を候補者所属の都道府県医師会といたしていただきますことをご承知おきます。

本賞は、都道府県医師会からのご推薦が無ければ成り立たない事業ですので、ぜひとも本賞候補者のご推薦にご協力賜りたく、よろしくお願いいたします。

敬具

■赤ひげ大賞推薦状況■

		第1回	第2回	第3回	第4回
1	北海道医師会	◎	◎		
2	青森県医師会	○	○		
3	岩手県医師会	○	○	◎	
4	宮城県医師会		○		○○
5	秋田県医師会	○	○		
6	山形県医師会	○	○		
7	福島県医師会				○
8	茨城県医師会		○	○	○
9	栃木県医師会	○	○		◎
10	群馬県医師会		○		
11	埼玉県医師会		○	○	○
12	千葉県医師会		○		○
13	東京都医師会	○	○	◎	
14	神奈川県医師会		◎		◎○
15	新潟県医師会	○		○	
16	富山県医師会	○	○		○○
17	石川県医師会		○	○	○
18	福井県医師会		○		○
19	山梨県医師会				○
20	長野県医師会				
21	岐阜県医師会	○			◎
22	静岡県医師会			○	
23	愛知県医師会		○	○	
24	三重県医師会	◎		○	○
25	滋賀県医師会	○	◎		
26	京都府医師会			○	○○
27	大阪府医師会				
28	兵庫県医師会	○	◎	○	
29	奈良県医師会	○			
30	和歌山県医師会	◎			○
31	鳥取県医師会		○	○	◎
32	島根県医師会		◎		
33	岡山県医師会				○
34	広島県医師会	◎	○	○	○
35	山口県医師会			○	○
36	徳島県医師会		○	◎	
37	香川県医師会	○	○		
38	愛媛県医師会		○	○	
39	高知県医師会		○	○	
40	福岡県医師会	○	○	◎	○
41	佐賀県医師会				
42	長崎県医師会		○		
43	熊本県医師会		○	○	◎
44	大分県医師会	◎			
45	宮崎県医師会		○	○	○
46	鹿児島県医師会	○	○	◎	
47	沖縄県医師会				○
		20件	31件	21件	27件

◎ : 赤ひげ大賞受賞者

推薦要領

【目的】地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当て、その活躍を顕彰することで、各地の医療環境整備、医療活動の充実に寄与することを目的とする。

【主催】日本医師会 産経新聞社

【後援】厚生労働省（予定）、フジテレビジョン、BSフジ

【特別協賛】ジャパンワクチン株式会社

【表彰】都道府県医師会長から推薦された候補者の中から、日医役員を含む第三者を交えた選考委員会において受賞者5名を決定し、表彰を行う。受賞者には、賞状と記念品および副賞100万円を贈呈する。

【対象者】・病を診るだけではなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師

・日医会員あるいは都道府県医師会員で現役の医師（但し、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）

※第5回より年齢基準はなくなりました。

※過去の受賞者は、別紙または日医 (<http://www.med.or.jp/people/akahige/>) あるいは産経新聞の赤ひげ大賞 (<http://www.akahige-taishou.jp/>) のホームページをご参照ください。

【推薦方法】本賞受賞にふさわしいと思われる方（原則1名以上2名以内）を各都道府県医師会長が推薦

※本賞対象者として、過去に推薦された方の再度の推薦も可能です。

【提出期限】平成28年8月19日（金）

推薦書送付先：

〒113-8621 東京都文京区本駒込 2-28-16

公益社団法人 日本医師会 広報・情報課（担当：田中、森田、菅生）

※ 「候補者推薦書」はパソコン、黒インク、黒ボールペン等ではっきり記入し、オリジナルを提出して下さい。ご応募いただいた書類は原則として返却致しませんのでご了承下さい。

※ 「候補者推薦書」に記載された個人情報に関しましては、本賞の選考や受賞者の報道関係への発表に使用することとし、それ以外の目的には利用いたしません。

※ 「候補者推薦書」はWordデータとして、文書管理システムに掲載しています。

なお、受賞者には、産経新聞紙上並びにBSフジの特別番組においてご紹介させて頂くことを申し添えます。また、候補者は、受賞のいかんにかかわらず、日医提供番組「赤ひげのいるまち」（BS-TBS）にご出演頂く可能性があります。

推 薦 書 の 記 入 に つ い て

1. 今回より、年齢基準はなくなりましたので、70 歳以上の方もご推薦が可能です。
2. 主な功績内容は、具体的な事例を挙げて、候補者の人柄や状況等が分かるようにできるだけ詳しく記入して下さい（1,000 字以内に収めて下さい）。
※功績内容の記入方法を詳しくお知りになりたい場合は事務局までご相談下さい。
3. 候補者推薦書の Word データ版を、日本医師会文書管理システムの「お知らせ」欄にも掲載しておりますのでご活用ください。
4. オリジナルを提出して下さい。ご応募いただいた書類は原則として返却致しませんのでご了承下さい。

第1回「日本医師会赤ひげ大賞」受賞者



北海道 松田好人医師(44歳) 名寄市風連国民健康保険診療所 医師

～在宅療養支援診療所～「最期は我が家で」～

平成17年の着任以来、一人で外来診療、在宅医療、特別養護老人ホームの嘱託医、ケアハウスや老人介護施設の入所者への訪問など幅広く活動。仕事に出勤する人のため、毎月1回朝7時からの早朝診療を実施。平成19年に在宅療養支援診療所の指定を受け希望する患者には看取りにも訪問。がんや老衰など、これまで25名を看取っている。



三重県 久藤眞医師(66歳) 久藤内科 院長

～親子二代で地域医療を支える～

親子2代にわたり地元根付いた医療活動が続ける。父は津市空襲の時も疎開せずに診療を続け、戦後も自転車で昼夜往診した。寝たきり老人の患者の中には、子供のころお世話になった人も。患者家族との信頼関係もしっかりと築いている。往診鞆には旧制学校の徽章、校歌の歌詞、昔の写真を入れている。認知症が強度でも昔懐かしい旧制学校の事や軍隊の事、近所の建物などは強烈な印象があり、認知症を超える第一歩として最適な話題となる。このため普段から津市の古い地図や連隊史などを見ている。三重県の「血友病友の会」組織化に尽力。



和歌山県 横手英義医師(60歳) 横手クリニック 院長

～医療情報共有システムで“チーム在宅医療”～

個々で活躍する医師をまとめ、地域全体の住民の健康を守るために奮闘。そのための医療情報共有システム“ゆめ病院”の開発に取り組んできた。ゆめ病院を地域の中核病院にも導入し、入院時の病診連携にも利用。在宅医療でもi-Padを利用し、複数の医師、複数の訪問介護ステーションによるチーム在宅医療として応用。もしかかりつけ医が不在になった時でも、急変した在宅患者にチームの当番医が対応できるシステムを構築した。



広島県 鈴木強医師(68歳) 鈴木クリニック 院長

～第2の医師人生を地域医療にささげる～

医師になって以来「50歳になったら田舎で地域医療に携わる」との信念のもと現在の交通の便の非常に悪い地域で開業。生活ドクターとして地域住民の健康管理に多大な貢献。冬季に急患が出た時には、40センチ以上の積雪の中を何時間もかけて往診に出かけるなど、過酷な環境の中、診療活動が続ける。最近では近隣地区の開業医が減少し、重責が増している。



大分県 中野俊彦医師(70歳) 直耕団吉野診療所 所長

～患者住民に寄り添うかかりつけ医～

365日24時間、あらゆる年齢層、常见病、救急など、基本疾患や初期疾患への対応や、慢性疾患の継続管理に取り組んでいる。診療所には診察券や事前予約システムをあえて設けず、診察室への患者の招き入れを医師自身が行うことで、患者の普段に近い様子を観察している。待合室は「来ただけでよくなる」と患者が言う。予防医学にも尽力。血圧、体重、散歩などを自分で測定して診察時提出する「自己申告ノート」により、患者の健康管理能力を向上させた。

第2回「日本医師会赤ひげ大賞」受賞者



北海道 下田 憲医師(66歳) けん三のこことば館クリニック 院長

～心を治すカウンセリング～

空知郡 幾寅という医療資源の乏しい地域で開業し、近隣の老人ホームや障害者施設、保育園の担当医として活動するかたわら、広大な同地域内における往診にも積極的に対応している。24時間献身的に医療活動を行うだけでなく、休日には同地域の老人ホームでアコーディオンを演奏するなど、まさに地域の健康・医療を支える医師と言える。



神奈川県 野村 良彦(67歳) 癒しの会野村内科クリニック 院長

～「病気」だけでなく「人」を診る～

三浦半島で最寄りの駅まで3kmという交通が不便な地域で開業し、外来診療から在宅診療まで「かかりつけ医」として幅広く患者のニーズに応え続けている医師。在宅医療では、多岐にわたる疾病や障害の方1,000名余りを担当され、500名以上を看取っている。また、市民活動として、がん患者を対象とした「がんなんでも相談」等を実施するなど、地域医療に多大な貢献をしている。



滋賀県 小島 輝男医師(68歳) 小 串医院 院長

～地域が1つの病院のように～

滋賀県東近江市において地域医療における「医療機関」「患者」「地域」の良好な関係を実現させるため、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、歯科衛生士、健保職員等、立場の違う医療従事者が毎月集う、「三方よし研究会」を設立。患者さんにとって最善の方法を模索するためのコミュニケーションを実現している。



兵庫県 大岩 香苗医師(55歳) 大誠会大岩診療所 院長

～家庭問題から子育てまで～

「赤ひげ大賞」初の女性受賞者。女性医師で外科医という大変貴重な存在として、上郡町約15,000人の地域医療を担っている。また、地域の中学校の校医 や上郡町の乳がん検診を一手に引き受けるだけでなく、町の取り組みにも積極的に協力するなど、高齢化率の高い同町において、障害者、高齢者の方が不安なく生活出来るよう地道な努力を続けている。



島根県 白石 吉彦先生(47歳) 隠岐広域連合立隠岐島前病院 院長

～「介護と医療」を一つに～

隠岐諸島の有人4島のうち、島前と呼ばれる西ノ島、中ノ島、知夫里島の地域医療支援ブロック制の拠点となる「隠岐広域連合立 隠岐島前病院」に、院長として10年以上勤務。人口約6,500人の当該地区における医療の中核としての役割を担っている。離島における唯一の病院では、医療機器をフル活用して治療に当たっている他、同院のスタッフによるチーム医療も実現し、住民から熱い信頼を寄せられている。

第3回「日本医師会赤ひげ大賞」受賞者



岩手県 岩田 千尋医師(67歳) 岩手県立大槌病院 院長

～東日本大震災後の現在も全力で医療再建に尽力～

38年間、大槌町民及び近隣住民の健康管理に貢献。東日本大震災の際には、被災した県立大槌病院において数日間にわたる停電と断水の中で懸命に医療活動に従事するとともに、入院患者を安全な場所に移送すべく奔走した。大震災後、人口と共に医師数も減少したままの大槌町において、現在も仮設大槌病院で定年退職を延長し、全力で医業に取り組んでいる。



東京都 西嶋 公子 医師(69歳) 西嶋医院 院長

～在宅医療に長年取り組む、地域のかかりつけ医～

東京都町田市という新興住宅地をベースに、33年間、かかりつけ医として活躍。開業当初から在宅医療に力を注いできた先駆者。「住民の、住民による、住民のための在宅ケア」を目標に、地域住民と協働し、国、都、市に訴え、市有地に600坪の高齢者施設を建設。外来診療、往診だけでなく、院内カンファレンスや住民との触れ合いの場を設けるなど、積極的な活動を行っている。



徳島県 鬼頭 秀樹 医師(60歳) 町立上那賀病院 院長

～過疎地域に移住し、24時間年中無休で患者に対応～

大阪・和泉市立病院の外科部長として活躍していたが、へき地医療に関心があり、那賀町で新設の手術施設が外科医不在のために活用されていない現状を知って家族と移住。院内手術数を4割増加させた。また、病院の近くに居住し、24時間年中無休で患者に対応し、重症患者の救命率を向上させた他、平日来院できない勤労者や児童のため、日曜午前中にも外来や往診を行っている。



福岡県 二ノ坂 保喜 医師(63歳) にのさかクリニック 院長

～あるべき在宅医療・介護を目指し患者に寄り添う～

「人生の最期は生活から切り離された病院ではなく、住み慣れたわが家で豊かな生活を過ごして欲しい」との思いで、足しげく患者宅に通い、患者やその家族との触れ合いを大切にしている。また、在宅医療への地域の理解を深めるために、在宅ホスピスのガイドブックを作成した他、在宅介護を支えるボランティアの育成にも力を入れている。



鹿児島県 古川 誠二 医師(65歳) パナウル診療所 所長

～離島医療をライフワークに日々の実践を続ける～

鹿児島県徳之島から始まり、今日まで、25年間に離島医療に従事。離島のプライマリ・ケアの実践を行っている。通常の診療の他、往診は高齢者を中心に24時間対応で、不在の時は全国から集まる先生方に留守を頼み、日々対応できる体制を整えるだけでなく、島内で対応できない患者は、ヘリコプターや小型飛行機を利用し、島外に急患搬送を行っている。また、公民館で英会話教室を開くなど、島内の教育にも尽力している

第4回「日本医師会赤ひげ大賞」受賞者



栃木県 高橋 昭彦医師(55歳) ひばりクリニック 院長
～重度の障がいを持つ小児の在宅医療に尽力～

0歳から100歳までの患者を対象として幅広く地域の医療を担う傍ら、在宅療養支援診療所として設立したNPO法人「うりずん」の理事長として小児の在宅医療に尽力。医療的ケアが必要な子どもの家族が24時間過酷な介護を強いられる中、人工呼吸器をつけた子どもを預かる重症障害児者レスパイトケア施設を開設。子どもにとって楽しい場所であるとともに、親たちが安心して預けることができる場所をつくることで家族の暮らしを支援している。



神奈川県 山中 修医師(61歳) ポーラのクリニック 院長
～身寄りのない人に寄り添い生活面でも支援～

日本三大日雇い労働者の街、横浜市中区・寿地区の住民の「医衣食職住」環境を改善すべく医療施設を開設。「家族がいない人のための町医者」になることを診療の理念として、身寄りのない高齢者や疾病を抱える地域住民の人生の質の向上を目指している。また、地域のチームリーダーとして自身で立ち上げたNPO法人「さなぎ達」と協力し、路上生活者の夜間パトロールとともに健康状態の把握、食事の提供等にも従事している。



岐阜県 土川 権三郎医師(64歳) 丹生川診療所 所長
～在宅で過ごす患者にきめ細やかなケアサービスを実践～

「患者さんの希望に応え、希望を叶えてあげたい」という思いから地域医療・在宅医療に取り組む。赤ちゃんから高齢者まで症状も多岐にわたる患者さんを診察。在宅で暮らしたいと願う全ての人の希望を実現するため、対象者一人ひとりに焦点を当てたケア・カンファレンスを週1回行う等の努力の結果、在宅で看取りをする人が町内の全死亡者の33%となった。アルコール依存症の問題にも携わり、地域医師の連携に努めている。



鳥取県 高見 徹医師(66歳) 日南国民健康保険日南病院 名誉院長
～まちの道路を病院の廊下に見立て往診に奔走～

「まちは大きなホスピタル」「まちの道路は病院の廊下」をモットーに積極的にまちに出て、毎日の往診では100km走ることも珍しくない。高齢化率47.2%でも、在院日数は全国平均を大きく下回るなど、高齢になっても家族や地域で見守りを続け、自宅に住み続ける高齢者が多いまちづくりに貢献している。また、日南病院のモデルが今後の都市部での地域医療に必ず役立つと考え、新しい地域包括ケアシステムの構築にも奮闘している。



熊本県 緒方 健一医師(60歳) おがた小児科・内科 理事長
～小児在宅医療の充実を図り重症の子どもと家族を支援～

開院当初から一般診療を行う傍ら、当時は一般的ではなかった小児在宅医療支援を自ら開始・発展させた。超重症児とその家族及び小児在宅医療に関わる全ての人が安心して在宅医療に取り組めるようネットワーク作りにも尽力。また医療型短期入所施設「かぼちゃんクラブ」を併設し、家族の負担の軽減にも努めている。全国的に評価の高い開業小児科医が出務する小児救急医療「熊本方式」においても、中心的な役割を担っている。